

本邦最初のフランス語会話本について 富田 仁

— 村上英俊『仏英独三国会話』 —

村上英俊^①（文化八年〜明治二三年 1811〜1860）が江戸深川猿江町に達理堂と称するフランス語の塾を開いてから五年目のこと、明治五年に本邦最初のフランス語の会話本が刊行されている。すなわち『仏英独三国会話』がそれである。見返し右肩には、村上松翁撰、門人中校とあり、中央に書名が記され、左側に、私学 達理堂藏とある。さらに上段に、明治五年稟准と書かれている。

本文は横罫十二行で二十丁からなり、凡例に記されているように各丁、上段がフランス語、中段が英語、下段がドイツ語の順に同一内容の文を示し、それぞれ読みを片仮名で記し、さらにその下に訳文を添えている。

本書には序跋、出版元の記載はないが、滝田貞治氏は「他の著書同様須原屋、山城屋の共同出版のものであらう事は疑ふ余地がない。」^②と版元を推定されている。

『仏英独三国会話』の刊行は、村上英俊の最初の字書『三語便覧』（嘉永七年）がフランス語・英語・オランダ語の三語対照字書であり、さらに、べつに、オランダ語の代わりにドイツ語を入れた三語対照字書を出したとききわめて深いかかわりをみせているように考えられる。

「仏英蘭の三語便覧に対して、仏英独の同書の再版本があるとい

われている事は、本書の存在よりしてもその当然性は十分にうなづける所である。」^③

と、滝田氏は『仏英独三国会話』に触れた解説で述べているが、現在では、仏英独の『三語便覧』の刊行も所在も確認されているので、『三語便覧』の仏英独版とこの『仏英独三国会話』との関係も当然考えられるのである。

ただし、『三語便覧』にしてもそうであるが、『三国会話』もまたその原拠となっている書物がなんであるのかはいまのところ判っていない。この時期の字書類には、しばしば英語とフランス語を並記したものが刊行されているが、この種の数カ国語対照字書が出版されたのもそうした事情を反映したためであるかもしれない。一方欧米で出版された字書をそのまま翻訳したことも十分に考えられる。その場合、英語圏の人びとのためのフランス語学習の便宜から出された字書に邦訳を添えたものが一番重宝がられたことを想像するのはべつにむずかしくない。^④

日本人が独自に新しく編纂することはとうてい望めない時代では既成の字書に手を加えるという方法はもとも実際的であった。したがって、英俊にしてもその種の知恵を働かせたことだろう。

『仏英独三国会話』が出版された年、英俊の達理堂は大きく拡充

されたのであるが、一方では、英俊の学業の理解者であり、内助の人であった妻女、兼を病死させている。達理堂は開塾以来、文明開化の時運に幸いして多数の門人を擁して盛況をきわめ、「達理堂門人名簿」には四百二十九名の名が記されている。だが、一方では、英俊のフランス語の問題点が次第に世人に取り沙汰されてくるようになった。すなわち、英俊のフランス語の読み方や発音が本当のフランス語のそれとはずいぶん違うことが指摘されるようになってきたのである。

「英俊の仏学は天下創開の第一人者として歓迎せられた。彼の仏学は亦独学といふ点でも天下を驚歎せしめた。蘭語より入って仏語を学び、更に英語、独語、羅句語をも究めた。が独学は遂に大きい槍痕を彼に残して了った。和蘭語は相当よく読めたらう。然しそれより類推した仏蘭西語の読法には多くの危険性を伴はざるを得なかつた。これが幕末明治初期にかけて仏蘭西の学……重に法律と兵学であるが……漸く起るに及んでは、仏語専修の学者も世に現はれて来るやうになつた。」

滝田氏はその間の事情をこのように説明しているが、英俊の偉業はひとえに刻苦呻吟の末にフランス語を独学したところにあるのであり、箕作麟祥のような実際に彼地を訪れた学者が出現するに至っては、英俊の仏学は影もかすむしかなかったであらう。明治三年頃から英俊の塾からも麟祥の許に走る門人が出たようであるが、前述のように五年には塾も拡充していると、『仏英独三国会話』刊行の時点では、まだ達理堂は隆盛を誇っていたわけである。(もともと、達理堂の余命はあと五年しかなくて、明治十年には閉塾している)。村上英俊は、その本質においては学者であり、

フランス語を実際に役立てるような意志は乏しかった人のようであったが、それでも、そのフランス語の知識を自分ひとりのもとはせずに、字書のような形でこれを広く世間に伝えようという熱意は十分もっていて、多くの著作を残している。たとえ世間で英俊のフランス語の発音についてあれこれ批評しようとも、彼には彼なりの自信をもって堂々とそのフランス語を教えたのであり、さらには読み方を片仮名で示していたのである。

英俊は「実用に適する外国語会話の本も作って見たいと思ふ」^⑦ようになった結果、『仏英独三国会話』の刊行に着手したのである。

すでに本邦最初のフランス語字書である『三語便覧』を刊行して、フランス語学者としての地位を築き、さらにそのあと『仏英訓弁』(安政二年)、『五方通語』(安政四年)、『仏蘭西詞林』(安政六年)、『仏語明要』(元治元年)、『英語箋』(安政四年)、『文久三年』、『仏語明要・附録』(明治三年)などの著作を刊行して、あとは会話の本を出せば一応すべてを出版したという気があつたのではないだろうか。しかも、この会話本がたんにフランス語の会話だけではなく、英語とドイツ語のそれをも含むことによつて、英俊の語学者としての学殖の広さと幅とを示すものにしつたいというような抱負さえこれに托していたとも考えられる。すくなくとも、英俊が『三語便覧』の仏・英・独語版にすでにしてみせたドイツ語への関心をここで再認するような内容の会話本にこれを仕上げていく点は注目されよう。重要なのは、もしも英俊がドイツ語にまったく無知である上に無関心であれば、仏・英語のみの会話本に縮めることだつてきたはずである。だが、彼はむしろドイツ語にも片仮名で発音を記して、そのドイツ語の知識をひけらかしているのではあ

小論では、紙数の関係から、英後のフランス語の会話の問題点としてのみ考察するものとせよとせられた。

「会話の種數百四題、朝の挨拶、買物、値段、時計、仏蘭西語で話す、年令、書籍、時(昨晚今朝)、天候、手紙といふやうな事が会話の主題となつて居る。」

滝田貞治氏の解説は、わびむじ簡潔に『仏英独三國会話』の内容を要約して居る。

挨拶……Bonjour, monsieur. (アサタサマ フキゲンヨク)

Comment vous portez-vous? (アサタ フキゲンヨク)

Fort bien, et vous-même monsieur. (甚タヨロシク アサタモヨロシク)

Je suis bien aise de vous voir en bonne santé. (私ハ甚タウレシク)

ソノ アサタノフキゲンヨクヲ見テ)

Au revoir. (マダ御田ニカハルマデ)

Faites mes amitiés à madame votre mère. (アサタノ母サマニ)

私ノサツデヲシテラケレ)

Je suis ravi de vous voir. (私ハアサタニ御田ニカカツテウレシク)

ト)

以上は「挨拶」に關係ある会話のうちフランス語の部分だけを抜き出したものである。

これを詳しくみると、フランス語の文の下に英語文とドイツ語文が置かれ、その下段のの野の中に二字ずつ縦書きの和訳文が記されて居る。冒頭の文としてこれを例示してみよう。

ボンジュール、 monsieur.

good morning, sir.

guten morgen, mein herr.

フキゲンタマフ

ソノフキゲン

フランス語の発音はおおむね正確ではないが、独学で修得したフランス語としてこれを考慮するとき驚くべきところも散見される。

Comment vous portez-vous?

の場合、Commentの語の最後の子音tは読んではいない。これはvousの語尾の方にも示されて居るから、英後は語尾の子音が無音なることを知つたものと考えられる。だが、Commentのyouが二字重なられたとき「コンメン」と発音して居るといふのである。これは[kamã]と発音するべきであつて、英後の発音は、おもしろい誤謬を犯して居た。このように、彼の発音法は決して正してはゐなかつた。これはいぎの文章ではっきり示されて居る。

Comment se porte monsieur.

カヨクゴク父

インキハチ

すなわち、Commentは[kammé]と発音されて居るのであり、その発音法は恣意的である。この種の不統一は随所にみられるから、なほCommentばかりがやうではなう。【下線筆者・以下同】

Je vais à la poste.

スリマメ郵私

マインヂヤ飛

Je vais écrire une lettre

初カ綴私
スメキヲ申

動詞 aller の一人称単数の人称変化の発音が前者では「Je vais.」後者では「Je vais」というふうに通りに行なわれているのゆゑの一例である。その一例をあげよう。

C'est le chemin le plus court.

スイコ道ヲ甚
マカチカク

C'est une pastre et cinquante cents.

マサチニ一夫
スイコ分兩ハ

こゝでは「C'est」の読み方に二通りあることが問題となる。ほかの多くの場合が前者の読み方、すなわち「C'est」と読んでおり、英俊はあくまで誤読してゐる。

C'est dix pastre. C'est trois pastre et indub....

なごで来いそれは示されてゐる。

このような発音の問題で顕著なのは複合母音の読み方であらう。

「ai」の読み方が行なわれていたようである。

Parlez-vous français?

シ * キイ ヲ フランソワ

Je ne sais pas encore

シラフ * サイ パス アンコル

J'ai besoin d'une plume métallique.

なごがその例であるが、一方、
Je fais beaucoup de fautes.
mais il est presque relabli a present.

などの読みの表記は「ai」を「[e]」と発音しようとした証拠であり、注目されよう。本来の発音「[i]」とは違つていても、仮名で表記するという特殊事情を考慮するとき、この程度の差異は許容すべきであらう。いずれにせよ、英俊は「ai」を「[e]」または「[o]」と読んでいたやうである。

「おど、oi」に関してみることにしよう。これは「[wa]」と発音されるのだが、英俊は、
donnez-moi une plume.

シ * スル ヲ プム

Je ne le crois pas.

アベク プラシユ、レ ヴォイシ。
シラフ * アッペンダイ セ ソイフ。

の場合に明瞭に看取されるやうに、二通りの読みをみせている。
「[wa]」と「[oi]」の二つの読み方である。Moi はほとんど「sw」が「[mwa]」とあるが、soir は hier soir にのみみられる「[swa]」と読む場合と、前記の例 soir のやうな「[soi]」との場合の二通りの発音となつてゐる点に注目したい。だが、概して云えば、「[wa]」と読んでゐる例の方が多いことを見落してはなるまい。
ところで、英俊が動詞の人称変化に関してどのような読みを示していたかは興味深いところである。いま、不規則動詞の二、三の場合をとりあげてみた。

êtreの場合

シ * スイ アリ

Je suis arrivé hier soir.

avoirの場合

J'ai besoin d'une plume métallique.

vous avez une bonne mémoire.

など、必ずしも正確ではない。とくに「je [ʒe]」は「ジ」と記されてゐる。étes-vous [ɛʁvu] も「エテ・ブウ」というふうに読みが示されてゐる。まして「faire」のような動詞になると、まったく不正確である。

Je fais beaucoup de fautes.

faites mes amitiés à madame votre mère.

にみられるように「fais [fɛ] / faites [fɛʁ]」の読み方は英俊にできないかつたようである。

発音の問題として看過できないのは、英俊が、たとえば「la poésie [la pɔst]」を「[la poste]」と読んでゐる点である。

Je vais écrire une lettre.

mon frère le parle mieux.

この二つの文では、この語尾の「o」の読みが二通りに示されてゐて、これも不統一の譏りを免れていないようである。だが、定冠詞または人称代名詞の直接補語形としての「o」は正しく「[o]」と読まれてゐる。

フランス語の読み方のなかでも一つの特別なものとして、リエゾン（リエゾン）の問題があるが、英俊の場合、一応はリエゾンを理解してゐたようである。

Je suis arrivé hier soir.

vous avez une bonne mémoire.

本来、母音字と前に置かれた子音字との間にリエゾンが行なわれ

るのだが、その場合、前の子音字 S は発音上 [ʒ] となるので、仮名振りの表記「サアビー」とか「サベ」& にかになることは決して正しくない。「サ」を「ザ」と改めることがリエゾンそれ自体としてのはぞましいのである。とはいへ、英俊は (S) の音でリエゾンして、いわゆるリエゾンについての知識は示していたわけである。

英俊の発音法をこのような会話本だけで判断しようというのはやはり無暴であろう。だが、彼の発音を伝える資料としてはこの会話本以上に適当なものもない。発音を録音してゐるような時代でもなければ、この種の方法で彼の発音法、読み方を検討するほかがないのである。

きわめて大雑把ではあったが、若干の例について英俊の発音法の問題点を考察してみた結果、彼のフランス語の発音法はすこぶる不統一であり、非常にムラがあることに気づかなくてはならなかつた。

仮名で示されているため、その発音の質の検討は困難であり、わずかに発音上の顕著な傾向をとりあげて、これを考察するにとどまつたのだが、ときには驚くほど正確であると思つと、べつ々ときにはまったく不正確で、その落差は激しい。フランス語では一般的には、語の末尾の子音は発音されないが、英俊はこの基本をわきまえていたようである。しかし、英俊のフランス語は大筋では一応妥当な発音法をみせていたが、詳細にみていくと、かなり逸脱した発音、ブロークンのそれであったことが推察される。

この欠陥がおそらく明治五年前後を頂点として急激に門弟たちが塾を離れていく原因をつくりあげていたのであろう。英俊先生の方

フランス語はフランス人には通じない、という世間の噂はあげてひとえに英後の発音の不正確さに根差したものであった。

ところで、『三国会話』の訳文をみるとき、やはり若干の疑義をはきみたいような訳文がみられる。いわゆる誤訳ないし不適訳が見出されるのである。

prenez-moi votre canif, si il vous plait.

カ私リ筆ヲ取イタク若
セニヲキヲフトヨナシ

この公文の意味は、「どうか、あなたのナイフを私にお借してやらう」というほどのもので、英後は“si il vous plait”をわざわざ「若シバナタヨイト思フナラ」と文字通りの訳文にしてゐる。

apprenez cette page par coeur

イナ習ヲ心ロト此
サヒヲカヨク

英後は、こゝでは「par coeur」を「心カラ」と訳してゐるのであり、熟語的表現についての知識の不足を示してゐる。

parlez-vous français?

フランス語ヲ
カナデスランナ

「フランス語ヲ話ス」は parler en français であり、この公文は「フランス語ヲ話スカ」と訳すべき内容のものである。

この種の欠陥を探していくことはかなり容易であるが、一方では il ne coupe pas bien.

シメザクガ切
セリヨシ

Isons un peu.

トキヲ少
シクナラシ

など、たゞみに意識している箇所も多い。

さらに注意しておきたい点は、英後の訳文で彼の生きた時代の一つの表現となつてゐる、今日では、そこに時代色をみないわけにはいかならぬものがあることである。たとえば、

Etes-vous venu par la diligence?

カツチヨ二脚タク
タク出テ車飛テ

Non, je suis venu par le chemin de fer.

クイテ車蒸私イ
ツムニ氣ハエ

J'ai besoin d'une plume métallique.

シカンカ私
イホ筆ヲム

などがそれである。

英後の『三国会話』の出版の年には新橋と横浜間に鉄道が開通したのである。「蒸気車」という表現にはやはりそうした時代色が濃くにしみ出ているのである。

Je vais a la poste.

シヨムム脚私
マインガヤ飛

この訳文も、所詮は明治初年のそれであるが、英後が会話本にこうした文章をとりあげていることにも時代が感じられるというものである。

なお、『三国会話』の欧文はすべて手書きであるが、そのためか

多少の誤記もある。

venez me voir cette après-midi.

de quel pri est ce livre?

下線の部分はそれぞれ cet, prix と改められるべきであるが、*cette* については指示形容詞の誤用があり、*pri* に関してはあまりに誤記とみられる。〔以上のほか、前述のフランス文にもフケントの欠落がみられるように細い箇所では誤記が多い。〕ところで、この種の誤謬がみられるとはいえず、この『三国会話』は初学者の学習と利用の便宜を考慮してすべて片仮名で発音・読み方を表わしているという点で、きわめて高く評価されてよいだろう。この時期では、いわゆる発音記号もない。片仮名をルビのように振るしか、発音や読み方を表わす方法がない。英俊はそれを敢行したのである。その結果、彼自身の発音の正確さが世間一般に知られることにもなり、批判の対象となったことが考えられるのである。だが、今日、私たちはこの会話本によって、その時期のフランス語の発音の一応の基準を知ることができるのであり、この意味では資料としての史的価値はすこぶる大きい。さらに、英俊のフランス語の学力の程度をこのような会話本から判断することも、それゆえに可能なのである。すなわち、英俊の発音は決して一定した方法に依拠していたわけではなく、不変不動のものではない。たとえば、複合母音字などの発音法において、それは顯著にみられる傾向である。オランダ語の学習からフランス語への道に入った経歴が、必然的にフランス語の発音をオランダ語のそれにしてしまっているように、たとえば、*voire* [voir] を [hoir] のように読んでいる事例が多い。

紙数の都合上、『三語便覧』、『五方通語』、『仏語明要』など

を対照することにより、発音、訳語などの変遷を考察することも大切であるし、英俊の発音の知識を知る上では『洋学捷徑・仏英訓弁』を検討する必要もあるが、その検討もつきに譲らなくてはならない。また、明治六年に刊行された『仏和会話篇』、『英仏和会話・初篇』などへのこの会話本の影響の有無、または対照考察などいまでは割愛しなくてはならない。だが、発音を付したのは英俊の独創であったように、上記二冊とも発音表記はみられないことだけは指摘しておきたい。

註

- ① 拙稿「村上英俊の仏学研究の意義」(『文芸論叢』第八号) 参照。
- ② 滝田貞治『仏学 村上英俊』中巻 三七丁。
- ③ 註2
- ④ 学習院大学、香川大学神原文庫に所蔵されているのを確認。
- ⑤ *C'est une piastra et cinquante cents.* (五一ページ参照) この文章は本書の種子本がアメリカのものであることを示唆している。
- ⑥ 滝田貞治『仏学 村上英俊』上巻 二六丁
- ⑦ 註6
- ⑧ 註2

〔本稿作成に際しては早稲田大学図書館蔵『仏英独三国会話』を参照したことを付記する〕